

## 大和言葉と日本人の情感表現に関する一考察

著者	何 慈毅
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	8
ページ	35-49
発行年	2010-08-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00022623">http://doi.org/10.15002/00022623</a>

# 大和言葉と日本人の情感表現に関する一考察

## 何 慈 毅

### はじめに

中国の漢字は表記記号として日本に伝わったと同時に、漢字の持っている音声と意味も日本に入った。そして、それに伴って漢字に付随する中国文化が日本に入ってきただけでなく、日本の固有の歴史文化も漢字の伝来によって初めて記録することが可能になった。日本の歴史文化の伝承と発展は漢字・漢文に頼るところが多いと言っても決して過言ではない。たとえば、日本最古の歴史書である『古事記』は、作者が古漢語の知識を活用して和文表記を試みたとされながらも、すべて漢字で書かれているし、日本における現存最古の正史である『日本書紀』は漢文の編年体という形式をとっている。また、現存する日本最古の漢詩集である『懷風藻』が最初の和歌集である『万葉集』より早くできていたことも事実である。現代日本においても、当用漢字というものが定められ、漢字の使用がかなり制限されているものの、依然として日本社会の各分野で広く使われている。

しかしながら、漢字、漢文が日本に伝わる前には、もうすでに「大和言葉」といわれる日本固有の言語が存在していた。当時日本人の間ではそのことばによってコミュニケーションが行われていたのである。そして、人々の情報交流の内容を記録するために、日本人が漢字を利用して万葉仮名と呼ばれる特有な表記法を創出し、やがて、その万葉仮名を簡略化して平仮名とカタカナという表記法が生まれたのである。それらの表記法によって書かれたものは和文といい、作られた歌は和歌というのである。小稿は和歌を通して、大和言葉と日本人の情感表現との関係を探ってみようとするものである。

## 1 万葉集と大和言葉

漢字文化が日本文化に大きく影響を与え、日本文化において極めて重要な役割を担ってきたということはいうまでもない。儒学の古典や漢詩などがその代表的なものだといえよう。しかし、日本では、漢字を読む場合、中国語をベースにする音読法と、大和言葉の音声をベースにする訓読法と二種類の読み方があり、漢文を読むときには、多くの場合は大和言葉の音声をベースにする訓読法で読むのである。例えば、『論語』を読むとき、「子曰、吾十有五而志于學」という漢字を見ながらも、「しののたまはく、われ、とをあまり、いつつにして、まなぶにこころぎす」<sup>1</sup>と、大和言葉で発声して理解していくのである。唐詩を読む場合もほとんど同じである。例えば、王維の「勸君更進一杯酒、西出陽関無故人」は、「君に勧む、更に尽せ一杯の酒、西のかた陽関を出ずれば、故人無からん。」と、「一杯」、「陽関」、「故人」以外は訓読み、つまり大和言葉で読まれるのである。

中国オリジナルの漢文の読み方だけでなく、自分たちの文体の使用においても、日本では古くから漢文と和文との使い分けが行われてきた。古代の文人たちは、漢詩を作ると同時に、和歌も書いたのであった。当時の日本人はどのような感覚で漢文と和文とを使い分け、漢詩と和歌をどのように捉えていたのだろうか。万葉集や古今和歌集に出ていた歌人の多くはみな飛鳥、奈良及び平安時代の天皇、皇族、貴族あるいはインテリたちで、そういう社会上流階層の人たちはみな漢学に通じ、漢詩も堪能なはずである。しかし、彼らは和歌を作るとき、漢語をほとんど使わない。例として、『万葉集』巻一に収録されている天皇御制歌を見てみよう。

春過而 夏來良之 白妙能 衣乾有 天之香來山<sup>2</sup>

(はるすぎて なつきにけらし しろたえの ころもほすてふ あまのかぐやま)

この歌は持統天皇(645-702)の作品だといわれ、意味は「もう春が過ぎて、夏が来たらしい。天の香具山のほとりに、白い衣をほしている」<sup>3</sup>ということ

である。緑肥え紅瘦せる折、作者が藤原の宮から京城の外の天香具山のふもとへ目を向けたら、庶民達がたんすの中から衣服をとり出して干しているところが目に入り、白い服は白い帆のようにふもとで点々とし、一枚の美しい絵になっている光景に感動し、思わず歌を歌ったのである。

歌は漢字で表記されているものの、万葉仮名と呼ばれる音声のみの表記法で書かれている。中には表意文字としての漢字も使われているが、読みは全部訓読みである。つまりすべて大和言葉で詠まれているのである。

もう一首の歌を見てみよう。

石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨<sup>4</sup>

(いはばしる たるみのうえの さわらびの もえづるはるに なりにけるかも)

これは『万葉集』第八巻巻頭に収録されている志貴皇子(しきのみこ)の歌春雑歌である。志貴皇子は天智天皇の子で、彼自身は皇位につかなかったが、その子の白壁皇子が称徳天皇の死後即位して光仁天皇となった。以後、ずっと彼の皇統が継続されてきたそうである<sup>5</sup>。

作者は岩の上を激しく流れる滝のほとりに、新芽が出たばかりの蕨が生え出すのを見て、ああ、春になったことだな、と感動し、自分の運命もこの春に芽生えた早蕨のように、これからいよいよ開けて来るだろうと希望に燃えたという。この歌も漢字で表記されているが、すべて大和言葉で表現されている。

『万葉集』は自然の息吹に敏感に感動する気持ちを表す作品だけでなく、家族や身内の人々への感情を表すものも多い。それも『万葉集』の魅力のひとつであろう。その中でも、九州など日本の海岸線を守る防人とその家族たちとの生き別れの悲しみ及び家族を懐かしむ気持ちを表す防人の歌が代表的なものである。例えば、『万葉集』第二十巻 4322 の作品をみてみよう。

和我都麻波 伊多久古非良之 乃牟美豆尔 加其佐倍美曳豆 余尔和須良礼受

(わがつまは いたくこひらし のむみづに かごさへみえて よにわす

られず)

この歌は防人の若倭部身麻呂（生没年未詳）が755年に書いたものだとわれ、意味は「我が妻もきつとわたしが彼女に恋しているように私のことを懐かしく思ってくれているだろう。わたしの飲む水にも彼女の面影が見えてくるから」というもので、歌は防人の夫が自分の妻を思う切ない気持ちを表している。『万葉集』の他の作品と比べ、「父」「母」「妻」「子」など、身内の人、つまり家庭内の人の呼称が多く用いられることが防人の歌の特徴のひとつである。次の歌は家を遠く離れた息子が母を思う気持ちを表すものである。

等伎騰吉乃 波奈波佐家登母 奈尔須礼曾 波々登布波奈乃 佐吉泥己受  
 祁牟  
 (ときどきの はなはさけども なにすれぞ ははとふはなの さきでこ  
 ずけむ)

意味は、「四季の季節はその時その時の花が咲くのだが、どうして母という名前の花は咲かないのだろうか」というものである。これらの和歌に見られるように、古代の日本人は自然の息吹に感動したり、あるいは親しい人を懐かしく思ったりするときの繊細な気持ちを言葉で表現する場合、外来の漢語より古来の大和言葉の方を用いる和歌という表現形式を選んだのである。

以上のような例はいくらでもあげられる。前にも述べたように、万葉集や古今和歌集に出る歌人たちはみな漢学に通じ、多くの人は漢詩もよくできた。では、彼らの作った和歌と漢詩はどういう違いを持っているのであろうか。以下では、飛鳥時代の皇族である大津皇子（おおつのみこ）の和歌と漢詩を比べながら検討してみよう。

## 2 大津皇子の和歌と漢詩

大津皇子（663-686）は天武天皇の第三皇子で、母は天智天皇の皇女・大田である。筑紫の娜大津（福岡県福岡市）で生まれたことで、大津皇子と呼ばれ

た。天武天皇には10人の皇子と7人の皇女がいたが、大津皇子の方は文武ともに優れ、器量も抜きん出て、人望があると言われ、天武の諸皇子の中で長男の草壁皇子に次ぐ皇位継承の有力者となっていた。686年9月9日に天武天皇は崩御した。10月2日、大津皇子は謀反の罪で逮捕され、翌日の10月3日に死刑に処せられた。僅か24歳の若さであった。大津皇子は詩歌の才能に恵まれ、『万葉集』には和歌が四首、『懷風藻』には伝記を添えて漢詩が四篇、それぞれ収録されている。ここではまず『万葉集』巻二に収録されている和歌を見てみよう。

足日本乃 山之四付二 妹待跡 吾立所沾 山之四附二<sup>6</sup>

(あしひきの やまのしづくに いもまつと われたちぬれぬ やまのしづくに)

この歌は大津皇子が石川郎女（いしかわのいらつめ）という女性に贈った歌であって、今風に言えばラブレターのようなものである。歌の意味は「わたしは二人の約束した場所でずっとあなたを待っていた。山の雫が木から落ちていて、着ていた服がすっかりぬれてしまったが、あなたはとうとう来なかった。どうしてあなたは来なかったのでしょうか」というものである。

話によれば、大津皇子と兄の草壁皇子とは、皇位継承の上での競争相手だけでなく、恋愛の面でも二人はライバル同士であったそうで、当時は大津皇子と草壁皇子と二人とも石川郎女という女性に恋し、恋文の和歌を贈っていたが、どうやら石川郎女は大津皇子の方にのみ返事をしたらしい。石川郎女が大津皇子に贈り返した歌は次のようである。

吾乎待跡 君之沾計武 足日本能 山之四附二 成益物乎<sup>7</sup>

(あをまつと きみがぬれけむ あしひきの やましづくに ならましもの)

石川郎女は大津皇子に対して、「あなたが山の奥で私をずっと待っていたため、山の雫でそんなに濡れてしまったことを真に申し訳ないと思っているが、

私としてはできるものならば、あなたを濡らしたというその山の雫になりたい。そうしたら、あなたとずっと一緒にいられるから」という恋人への思い焦がれる気持ちを訴えた。二首の和歌には現代風のラブレターのように好きだとか、愛しているとかは、一言も言っていないが、ともに相手に対する自分の愛情がどれほどのものかを、歌に託してありのままに相手に伝えている。

以上のように、日本の和歌は自然の息吹への敏感な感動を表すだけでなく、恋愛感情を呼び起こす耽美精神にも富んだものであり、作者は感情をストレートに表すことを避けるコミュニケーションの手法によって、大和言葉を通して互いにその繊細な情趣、いとしい感情、優しい気持ちを相手に語りかけるのである。『万葉集』の和歌を詠むと、その作品には男女の恋を題材とするものが多いということがわかる。つまり和歌は、主に私的な感情交流に用いられ、いわば、心と心との触れ合いという、非常にプライベートのもので、抒情の詩であると言えよう。

和歌の本質については、『古今和歌集』の作者紀貫之がその序文にこう書いている。

大和歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけて、言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をも和らげ、たけき武人の心をも慰むるは、歌なり。<sup>8</sup>

和歌は人の心に感じることを和歌の源の「種」にして、そこから「葉」が出るように言葉が出てくるものであると、和歌の本質をまず説明し、そして、花の間で鳴いている鶯や、水の中に住む蛙の鳴き声を聞くと、だれでも歌を詠まざりにはいられないだろうと、大自然に触れると人間は自然に歌を詠むものだと指摘し、和歌は力を入れないで天や地の神々を動かし、目に見えない死者の靈魂にまでしみじみとした感動を与え、男女の仲を睦まじくさせ、勇ましい武士の心までも和らげるものであると結論を下した。

これは和歌の起源論であり、和歌は人間の心を根本にして、内発的に言葉に表現されたものであると言っている。

では、和歌に対照して、漢詩はどうであろうか。中国の古典『尚書』「虞書・舜典」には「詩は志を言う、歌は言を永する、声は永に依り、律は声に和す」<sup>9</sup>と舜帝のものだと言われる言葉が記載されている。また、『毛詩』の序は「詩は、志のいたるところなり。心に在りて志と為し、言に発して詩となす」<sup>10</sup>と解釈している。さらに、中国近代でも、作家朱自清の著書『詩言志』<sup>11</sup>があり、似たようなことを述べている。中国ではやはり昔から現代に至るまで、詩は主に人の志を表すものだとされてきたのである。

中国のそういう「詩言志」の考え方もまた古代日本に影響を与えていて、古代の皇族、貴族あるいはインテリたちもまた詩を持って自分の志を表したのであろう。ここで大津皇子が書いた漢詩を二首見てみよう。

#### 述志<sup>12</sup>

天紙風筆画雲鶴（天紙風筆、雲鶴を画き）

山機霜杼織葉錦（山機霜杼、葉錦を織る）

赤雀含書時不至（赤雀、書を含んで、時に至らず）

潜竜勿用未安寝（潜竜、用ゐることなく、いまだ安寝せず）

この詩は『懷風藻』に収録されているもので、「大空を紙とし、風を筆として雲鶴を描き、山を機と、霜を杼と見立てて葉の錦を織る」というように、作者が自分の雄大な志をこの壮大華麗な詩に託しているように見える。前句の赤雀とは昔から瑞鳥とされ、『墨子』には「赤雀銜珪之岐社、日命周文王伐于殷」<sup>13</sup>という条がある。その大意は、「王の治世が天道にかなうと、赤雀が書を銜んでくると言われており、その赤雀を見た周文王は天命を承って周の時代を開いた」というものである。大津皇子は、この詩の中で自分を中国昔の周文王になぞらえたのである。また、後の句については、中国では潜竜はまだ帝位についでいない者のたとえであるから、大津皇子は草壁皇子に次ぐ皇位継承の有力者だといわれているので、この句は皇位につこうとする志向をほのめかすものであろう。こう見ると、やはり大津皇子の謀反は事実のようである。



大津皇子の謀反が事実か否かは別として、大津皇子は、好きな女性に恋心を伝えるには和歌という表現形式を選び、皇位に就こうとする大志は漢詩によって表しているのである。

やがて、大津皇子はその謀反の企てが発覚し、逮捕されて死刑になった。死に臨み、彼は『臨終』と題する五言絶句の漢詩を以下のように残した。

臨終<sup>14</sup>

金烏臨西舍（金烏、西舍に臨み）

鼓声催短命（鼓声、短命を促す）

泉路無賓主（泉路、賓主無し）

此夕誰家向（この夕、誰が家に向かふ）

この詩は辞世の詩であり、同じく『懷風藻』に収録されている。意味は、「太陽が西に傾くころ、夕暮れの太鼓の音がわたしの短い命を促すように聞こえてくるが、泉路に行くのは主も客もなく一人の旅のようで、今晚は必ずこへ宿るのか」、というものである。この漢詩を通して、わたしたちは作者が死に臨んで空へ向かって自分の不運を叫んでいた姿が想像できる。もし、『述志』が大津皇子の雲をも凌ぐ壯志を表すものだとすれば、この『臨終』は、その大志が実現できなかったことに対する絶望の叫びだと言えよう。

同じ作者の和歌と漢詩を比べてみると、和歌の方は非常に感性的なもので、自分自身に、あるいは限定された身内の人にやさしく語りかけるような私的な感情交流に用いられるものであるのに対して、漢詩の方はどこか知性的で、世間に向かって壮大な志を強く宣言する、あるいは絶望と悔しさを叫ぶような高ぶった感情の表現に用いられるようである。

ここに、面白い例がある。異郷への遠征時の心情述懐という意味では、先に挙げた防人の歌と同じだが、作者は一兵士ではなく將軍であり、しかも、その表現形式は和歌ではなく漢詩なのである。藤原宇合の『奉西海道節度使之作』である。

往歳東山役（往歳東山の役）

今年西海行（今年西海の行）

行人一生裏（行人一生のうち）

幾度倦辺兵（幾度か辺兵に倦まむ）

藤原宇合（694-737）は当時正一位太政大臣の藤原不比等の第三子で、715年には遣唐使として中国へ行ったことがあると言われ、719年には持節大將軍に任命され、陸奥における蝦夷の乱を鎮め、その後、式部卿、西海道節度使、正三位などを歴任した。これは、西海道節度使になった時の作品である。東山道へ行ったり西海道へ行ったりして苦しい旅の多い人生に対する個人的な嘆きのようなものであるが、遠く離れたうちの肉親への思う気持ちを表すものと比べ、やはり、將軍としての述懐ということで、個々の兵士の気持ちとは決定的に異なるものであり、和歌よりも漢詩がやはり相応しいのであろう。

以上述べてきたことを念頭に、次は阿倍仲麻呂の書いた和歌と漢詩を見てみよう。

### 3 阿倍仲麻呂の望郷の歌

阿倍仲麻呂は717年3月に第8次遣唐使の留学生として中国に遣わされた。20歳の若さであった。同行の人には吉備真備、玄昉、藤原馬養などがいた。のち、阿倍仲麻呂は唐の太学に学び、科擧の試験に合格し、725年洛陽の司經局校書として任官、728年左拾遺、731年左補闕と唐王朝の諸官を歴任した。その後、真備・玄昉らは帰国したが、阿倍仲麻呂は唐に官位があるということで帰国しなかった。752年、遣唐大使藤原清河の率いる第12次遣唐使一行が来唐し、中国ですでに35年も生活してきた仲麻呂は、玄宗帝に帰国を願い、やっと許された。しかし、阿倍仲麻呂や正使の藤原清河ら一行が乗った第一号船は日本へ向かう途中、暴風に遭って難破し、安南（現在のベトナム）に流され、帰国することができなかった。阿倍仲麻呂の中国名は晁衡（朝衡）と言い、李白や王維ら文人と親交があり、第12次の遣唐使船が難破した時に、その知らせを聞いて仲麻呂が死んだと思った李白は、『哭晁卿衡』（晁卿衡を哭す）という詩を作った。

この例からもわかるように、阿倍仲麻呂には中国人の親友として李白や王維のような有名な詩人がいた。仲麻呂自身も漢詩に長じ、多くの漢詩を残している。例としては、733年玄宗皇帝に故郷に帰りたいと願い出たが許されなかったとき、次のような『無題』という漢詩を書いた。

慕義名空在（義を慕う名空しく在り）  
輸忠孝不全（忠孝の全たからざるを輸す）  
報恩無有日（恩に報ゆる日も無し）  
帰国定何年（国に帰るは定めて何れの年ぞ）

そして、前述のように752年すでに55歳になった仲麻呂はやっと玄宗帝に帰国を許され、日本に帰る途に就くことになった。遣唐使と共に帰り道の明州（今の寧波）<sup>15</sup>という所に来て、夜になると中国の友人たちが仲麻呂のために餞別の会を催した。餞別の宴には親友の王維も見送りに駆けつけ、『送秘書朝監還日本並序』という詩を作って仲麻呂に贈った。

積水不可極（積水極むべからず）  
安知滄海東（安んぞ知らん滄海の東を）  
九州何処遠（九州何れの処か遠き）  
万里若乗空（万里空に乗ずるが若し）  
向国惟看日（国に向って惟だ日を看）  
帰帆但信風（帰帆但だ風に信す）  
鰲身映天黒（鰲身天に映じて黒く）  
魚眼射波紅（魚眼波を射て紅なり）  
郷国扶桑外（郷国扶桑の外）  
主人孤島中（主人孤島の中）  
別離方異域（別離方に域を異にす）  
音信若為通（音信若為ぞ通ぜん）

仲麻呂はとても感激し、『銜命還國作』という詩を以って返礼し、さらに自

分が長年身に付けていた剣を形見として王維に贈った。

- 非才恭侍臣（非才侍臣を恭うす）
- 天中恋明主（天中明主を恋い）
- 海外懷慈親（海外慈親を懷う）
- 伏奏違金闕（伏奏して金闕を違り）
- 非驂去玉津（非驂玉津を去る）
- 蓬萊郷路遠（蓬萊郷路遠く）
- 若木故園鄰（若木故園の鄰）
- 西望懷恩日（西望恩を懷うの日）
- 東帰感義辰（東帰義に感ずる辰）
- 平生一宝劍（平生一宝劍）
- 留贈結交人（留めて贈る交を結ぶ人に）

いかにも唐代文人の宴の雰囲気に溢れているが、阿倍仲麻呂は、酒を飲みながら夜空の月を見上げ、ふるさとを懐かしく思うと、思わず次のような和歌を詠み始めた。

あまの原 ふりさけみれば かすかなる みかさの山に 出し月かも<sup>16</sup>

この和歌は仲麻呂が世に残した唯一の歌で、『古今和歌集』第九卷の羈旅歌之406に収録され、題には「もろこしにて、月を見て読みける」と記されている。さらに「この歌は、むかし、なかまろをもろこしに物ならはしにつかはしたりけるに」との注釈もある。仲麻呂は「大空をはるかに仰ぎ見れば、月が出ているが、今の月は昔見た春日の三笠山から昇るあの月と同じ月なのだなあ」という心情を和歌という形式で吐露したのである。

35年も中国に生活していて漢詩も優れている仲麻呂が、そのときは思わず和歌を詠んだのである。それは、きっと彼にとってはやはり母国語の大和言葉以外にそのときの自分の心情を表すことができなかつたからに違いない。仲麻呂は、身はまだ唐にあるが、その思いは既にその月によって、すでに奈良の都

にあるのである。

1979年、中日友好の使者阿倍仲麻呂を記念するため、西安市の興慶宮公園内に阿倍仲麻呂記念碑が建てられ、石碑の一面には李白の詩「哭晁卿衡」を、もう一面には阿倍仲麻呂の和歌の漢訳がそれぞれ刻まれている。その漢詩は『望郷詩』と題し、次のようである。

翹首望東天（首を翹げて東天を望めば）  
 神馳奈良辺（こころは馳す奈良の辺）  
 三笠山頂上（三笠山頂の上）  
 想又皎月圓（想ふ又た皎月のまどかなるを）

その五言絶句の漢詩は、中国では阿倍仲麻呂が作った望郷の詩としてよく挙げられているが、中国人の誰かが『古今和歌集』の作品を漢詩に訳したものだという学者もいる<sup>17</sup>。しかし、誰が、いつごろ、それを訳したのかは、どこの資料に探してもその出典が見つからない。素直に考えれば、愚見としては、やはり阿倍仲麻呂本人の作だという可能性は大きいのではなからうか。当時饒別の宴では、多くの中国友人が駆けつけてきたと伝えられ、その場にいる中国人の友達は日本語の和歌がもちろん分からないし、また、仲麻呂が突然和歌を歌いだしたということに対しても、さぞびっくりしただろう。仲麻呂もおそらく、そのことに気付き、そして漢詩を持ってその望郷の気持ちを友人たちに伝えたのであろう。

ここではその漢詩訳は和歌の持つ意味を完璧に表していたかどうかのことを深く探求するつもりはないが、ただひとつ言えることは、仲麻呂はいくら祖国の日本を長く離れていても、心の根底にあるものはやはり日本人としての心であって、故郷への懐かしい思い出を率直に表すには大和言葉を用いる以外に表しようがなかったということである。

## 終わりに

以上述べてきたことを纏めてみると、以下のように言えよう。

日本は古くから漢文と和文との使い分けを行ってきたが、日本人にとっては、漢文漢詩によって与えられる感動と、和文和歌が与える感動とは、かなり違うものようである。和歌にもよく見られるように、日本人が繊細な気持ちを表すためには、外来の漢語漢文よりは、やはり古来の大和言葉を用いる方がもっとも表現に適しているのである。大津皇子の和歌と漢詩の作品から見られるように、和歌の方は非常に感性的なもので、作者自身に、あるいは限定された身内の人にやさしく語りかけるような私的な感情交流に用いられるのに対して、漢詩の方はどこか知性的で、高ぶった感情の表現に用いられるようである。ウチとソトという日本人的な考え方がこんなところにも反映されているといえよう。また、阿倍仲麻呂の例を通して、日本人にとってはやはり母国語の大和言葉は一番自分の繊細な気持ちを細かく表すことができるものである。

以上のような日本語表現における和語と漢語の使い分けは、昔だけでなく、現代においても行われているといえる。日本の演歌がその代表例である。中国でもよく知られている日本の歌、『昴』や『北国の春』などの歌詞を見ても分かるように、その歌詞はほとんど訓読みで、言わば大和言葉で発声して歌っているのである。たとえば「宿命」を「しゅくめい」と読まずに「さだめ」と読み、「呼吸」を「こきゅう」と読まずに「いき」と読み、「故郷」を「こきょう」と読まずに「ふるさと」と読む、などがそれであろう。

小稿はただ現象としていくつかの例を挙げただけで、深いところの分析までには至らなかった。大和言葉と日本人の情感表現との関係を検討するに当たっては、今後ともさらに多くの実例を集め、それを比較しながら分析する必要があるだろう。

## 注

- 1 「志于學」は「がくにこころざす」と読む場合もある。
- 2 『日本古典文学大系4』、岩波書店、1977年、26ページ。
- 3 石田吉貞、『小倉百人一首新解』、新塔社、1980年。
- 4 『日本古典文学大系5』、岩波書店、1977年、282ページ。
- 5 高柳光寿、竹内理三、『角川日本史辞典』、角川書店、1987年、1034ページ。
- 6 『日本古典文学大系4』、岩波書店、1977年、70ページ。
- 7 同、72ページ。
- 8 窪田章一郎校注、『古今和歌集』、角川文庫、1981年。
- 9 李民、王健撰、『尚書訳注』、上海古籍出版社、2004年。

- 10 毛公、『毛詩正義』、上海古籍出版社、1990年。
- 11 朱自清『詩言志弁』、華東師範大学出版社1996年。
- 12 『日本古典文学大系69』、岩波書店、1979年、76ページ。
- 13 墨翟、『墨子』、上海古籍出版社、1989年。
- 14 『日本古典文学大系69』、岩波書店、1979年、79ページ。
- 15 帰航の地は蘇州の黄泗浦（江蘇鹿苑）であるという説があるが、『古今和歌集』に“めいしうというふ所のうみべにて”という解説があって、それに従う。
- 16 窪田章一郎校注、『古今和歌集』、角川文庫、1981年、104ページ。
- 17 張声振、『中日関係史』第1巻、吉林文史出版社、1986年。

&lt;ABSTRACT&gt;

## **Yamato Kotoba and Japanese People's Expression of Sentiment**

HE Cil-yi

Kanji (Chinese character) culture had a great impact on Japanese culture, and has played an extremely important role within Japanese culture. However, before Chinese characters and Kanbun (Japanese written in Chinese) were introduced in Japan, there already existed a language peculiar to Japan, known as "Yamato Kotoba" (Indigenous Japanese Language). From early on Japan had two ways of reading Chinese characters: "on" reading based on the sounds from Kango (Chinese vocabulary), and "kun" reading based on the sounds in Yamato Kotoba, and there was also a distinction in the way of writing between Kanbun and Wabun (Japanese wording). The literati of ancient Japan wrote Waka (Japanese poems) as well as Kanshi (Chinese poems). For the Japanese, emotions conveyed by Kanbun and Kanshi are quite different from those of Wabun and Waka. As exemplified by Waka, Japanese choose indigenous Yamato Kotoba over the introduced Kango and Kanbun to express sensitive feeling. As can be seen in the works of Waka and Kanshi by Daizu, the Waka are extremely emotional and make use of a personal exchange of feelings, whereas the Kanshi seem to possess expressions of intellectual and haughty sentiment.